小栗外傳

弐編

叢碧軒

第二之卷

へ13
3919
9

へ13
3919
9

寒燈小栗外傳　卷之八

夜話

第十三編

東都　絆山戯編

處女佛堂ハ恵像を背戻て
負婦浴室ハ良人ハ奇遇を

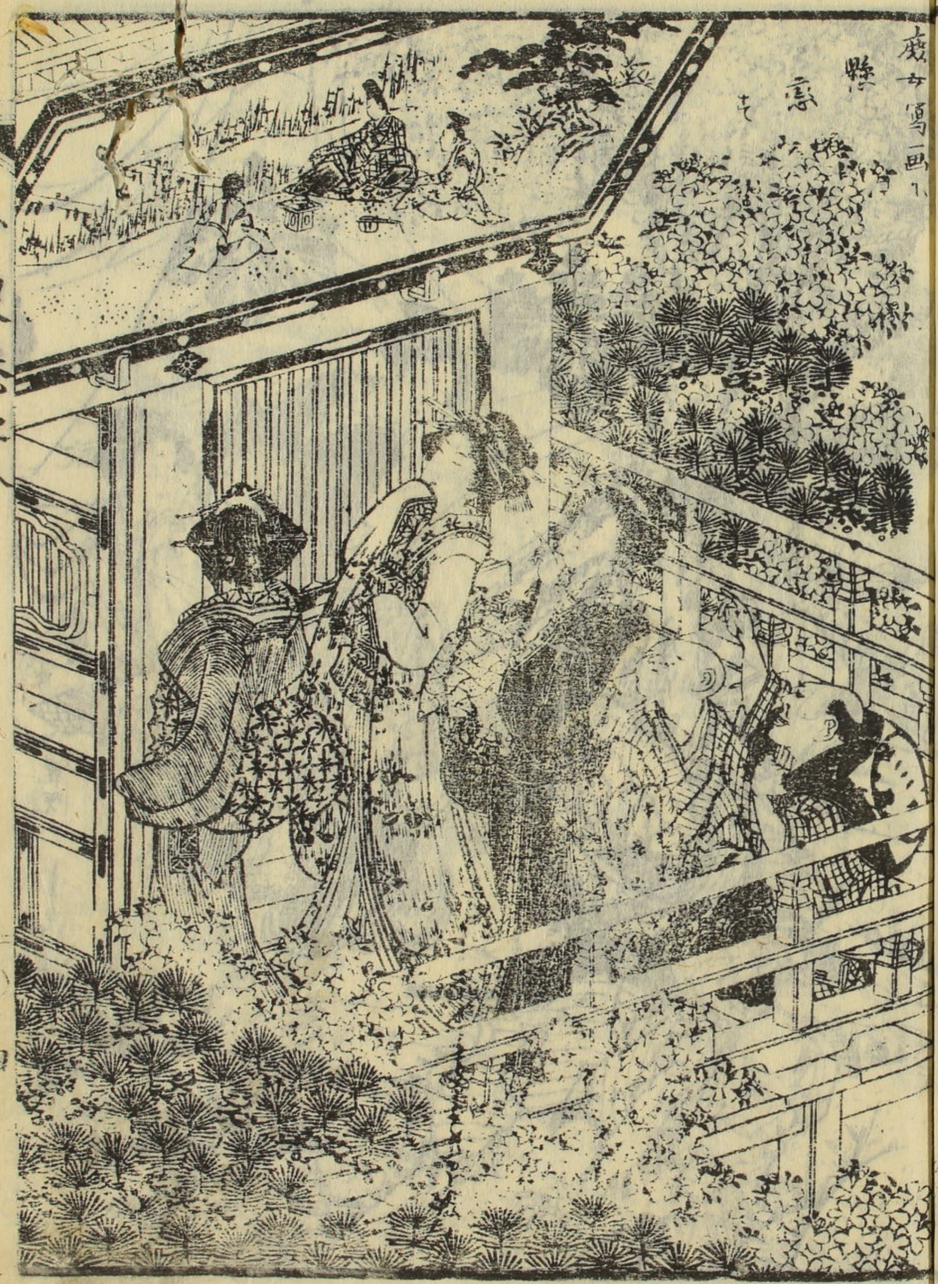
且説小栗判官代助重ゑ。藤沢寺の常阿上人の示ゆゑ。時運の至るを
待んとて三州二村山といふ地方に閑居して。世の光景を窺ひ。此頃三州の
うちまでも北ゑ寄ること邊鄙なれば。人の知ること少なれど。又世のすを知ら
ぬよりは。今主従斯令ひ居ることも辺鄙なれども人ハ疑ふまじて
禍ハ逢ふを嬢さ。且ゑ敵の動静を窺ひに便なく。ちのう人大識と起
さんと。祖代の旧臣名が駆れ居るを。招き寄ハ便悪しこと従平議を
定め。十人の郎等ハ。ちの美登小左郎の

順礼梵論偽猿牽。説経師うんどを扮形せ。鎌倉よりあて一色が紙を窺せ
まくらの舊國小総ゐ下らせ旧好のものを密ゐ集めゐり。小栗ハ二村山
の禁よりとどりの庵を営み。美登小左衛と主従二人山水を友にて
居くらしがはじめの程ハ少し紀貯ありし故糧ゐも事かゝをゐりまれど
巨万の富も居ながら食べが尽る形ふひまて幾月を経やゞゐ貯も乏く
なりぬ斯くまるが后ゐハ飢饉ゐ迫りるんゐ。今日をとることゝのの生営
を世と主従相議とも武士の果そ為鄙ゐ居く用なりのゐて鑑の
料を取べき術もなく殆難気に及び。小栗世ゐ栄一とて多くの藝
ゐ修ひたるるゐ文武の道ハ化生質恵とを好々れが其術ゐ賢く。古乃
金岡ゐもたち勝ほべき手カハのりるべら。武士のみるべき術よあらぶと。
世ゐ技窮もせてありしと。今急迫負困の身となり。不義の賊を貪くん

よりハと麦くの絡を恵ゐ宗冊とゐふ名を記し。笑堂小左衛ゐ持し當國ゐ
さらるゐ京すても責ゐしゐり其況豊舟ゐんどゝ〻ゐ〻ハいみき城年ゐ。
足ことも世ゐ行られ其恵をゐふりの鼠ゐぐきれば。主従ゐハを粕ゐるゐ尚
あまりゐりけるゐに此里ゐめでさくゐるゐる農夫あゐ。宿願のゐゐありて
美濃國寶光院の虚空藏ゐ絵馬を奉納せんと。小栗がりゐゐ願ゐるゐり
々ゐハ其笑堂國赤坂の虚空藏ゐ絵馬を奉らがやとゐゐど然ゐるゐ
恵ゐるし足下ハ當世ゐ二なれ紀年ゐたゐ某が奉納ゐる所の絵ゐ
を恵ゐのられしと頼こゝゐるゐ。小栗今ハ業とゐれ技ゐれば子細なく
諾ひね彼人喜び一礼をのべて又ゐ〻ハ當國ハ揺の里ハ古れゐれ名所
ゐて世ゐ知られゐるゐなれば在五中将旅衣の歌流ゐ〻形を恵れゐる
とゐか小栗ゐと易れてゐゐと回意ゐ彼人ゐよく恵ひ齊らしゐる

繪馬を小栗が家よりとゞめおかれ。亜具の料などを設け眺めくらし給へり
給ふ。幾日もわすれず出来しかば。彼人喜びよ堪へがたく。謝儀を与へ終に
赤坂なる宝光院へ絵馬を奉納なしたるに。然るに此絵馬勝れくしく
生動ねるが如く。業平の容貌。よく小栗に似たりとて。小栗を知るものゝ此絵馬
を観て。昔より亜工人物を写せば。自らおのれが容貌に似るものなりと云る
が。此亜のごとく亜人に似るものゝ口順しうば。小栗が実胤の生質世ふ
知られり。爾るに姫女を此絵馬を観ずして。嘆ずるに心を煩はせども多し。
且説美濃国青墓の宿万長に一人の女児あり。名を花児と唱へ
るに美女なり。人の親の心に醜女なれども。
人の子しるべく移ほうり立物にて。ゆるるふ平く数をあまて。
夫婦の心を竹取の翁が如ひをしつ。掌中の璧。掛の華と愛しみ女御后と

こそいに及ぶまじ。あられ宮禄ともに高北公まさるべき女婿とん世と数の
宝を費し和歌糸竹の師を京師より呼ぶ只顧その業をのみ学び
まり光陰虚字形く花児今年二八の美をむかへ年況和歌糸竹
の月を委ねしる労よや心ち姫しなり。寝食ともに易くざるば父母
これを憂る医療多くふまを尽しれとそろぐ。絵もえくと衆醫師
のいふ原此病を鬱氣より發るべ。俄に茶の効もあるまじ心静に鬱散の
技をさせば自ら氣も解薬餌の力も験めくんと況諭されて実さるる
もあらんとこれより夫婦。花児が心のまゝ。遊観のこと況のみなりし
まり。こゝに青墓と赤坂との間ふ金生山宝光院とて。いにしへ精舎有り本尊
を虚空蔵菩薩あり。大巌の中に安置しまるふ霊験殊に新なり。都鄙の
老若千里をも遠しとせず。あを運ぶの少くらず此山上より東方を眺望ば



蔵之の里杭瀬川芝薮の里なと眼下みありて風色いとうつくしき。殊に橘多くれば花も三春の匂い美酒あるうるされば万長夫婦をつかれ病おとてうくんかうと此虚空蔵菩薩に祈りて且は山色の佳景を遊覧さるく万長が妻小笹花児を伴ひて宝光院に御佛の寶殿にうつくしく匂ふ濃うを祈り奉り其后宝殿の四方を顧るに狂くの拾馬と所狭きまで懸並べるるるふ彼小悪ゝ恵さは在五中将の絵る勝まてうえんなれば花児ちれ眼をとめ熟く看るに人物草木悉くその真をえる巧くさぶれ絵に写せしとも想ひれどそれが中みも在五中将のさま生て言ふもおとく顔ちこの歌ある姿の都ものふ今世ふえり。ゆも及ばざる美羅男なれば花児これに心奪ひ眷恋の情頻まて心裡に念ずる中ノ女子うれけりのかは男子と夫とせば。世にある甲斐ありたぶ。今乃

悪原小
を
撃ち
懲て
一女こ
ろ
花見
小吉

世間ふ此君々よ似たる人あらぶ命丹ゆ捨て逢うんふ世を隔くる甲斐なのさよ
と。なれ恋ふ思ひ焦ふ折ふに傍ふ二人の漢子あって物語をする成
ば一人の云ふ。此宝殿の裡ふ掛くる絵馬も妻々れど在五中将の八偽ふ
休ふる写くられそいと愛くいみぐれ寡ふ美男のなえある業平公ハ
斯てぞおそそくん世の未ふ至りてハ此君ふ似ぐき人もほとうちかこち
ければ一人の漢子足下いこの絵馬を写し亜人を知ぶざれば。さハ世の間を
えるるこのふ某ハ此亜人宗丹を知まる。写し絵ハ其人の貌をのぶえと
むしより云るくふしたるが宗丹が容貌。この絵馬の中ふ君ふよくも似
たるん宗丹ふ烏帽子ふ衣冠せくふまし。則この移るの中ふ移る
ぞ。と。人々れば前の漢子嘆息し。さてハ今の世ふもかくほ漢子もあり
けふよ潘岳ふも劣らぬ人うと我ハ男子ふぐくふ此人と枕を共ふまとんとを

ほば命をも厭へじと褒戯まてく去ふるり。花児ハ此続話をうちぶくく
さてハ写絵のごとく男ハなれ世の人と想ひしに正しく今世ふ有るふよ
とそぐるふ恋ぞ添ゆれ母の小笹ハ女児ぶいくるを知ふぶ同色の美絵を
飾さし酒を敬させぐやと。百倶しふる下僕をして。とある花の下ふ毬
を敷く幕をもくし齋しふる榻を用き酒をもくふ歌舞を偽し。花児
が色をもくのうとくと花児ハ宗丹ぶるをのみ色人花をまれども
絵馬の中ふ人目ふ有りてさくふ心を楽しまぶ。酔くとして居さうけり。此
南府西国三十三所の観音ふ順礼をとまえし道者の年ハ五十ふも成くん
ぐくんとおぶるが前刺ふ小堂ふ休らひ居くふ花児ぶ花をとる舞
をまねて同ぶく小堂をわり。其暇を徘徊し刀文六文ふも成りねこと。
若く仕人ある。悪漢めきくれが六七人ふも花をえんとて此暇ふ有りくほを

いつかりけん順礼が杖彼悪漢の脇腹に當りしが。大に怒り。おのれ順礼ども世を経て形ばら一言の詫もせざるこそ行儀なれとて拳を捉へんとせし順礼を駆られて逃んとも脱まがく歩射対と陽さんとせし乳母子が乳こんとする幕の行よ走入り。助けあられとふうちやや悪漢ホ一般よ逃ひ入るあそ小母も乳児も伏とろくかくるく。支絡きはち慌忙すぎれば順礼仍方よ逃去るん其影ばふ乳くと此附悪漢ホを小母ホ對ひ今うとれくよ急れぜ順礼正く此幕のうちへ逃入りしが仍すよ落ーたまうあそらく此の人半ー給らどハおん分こそ捌ずるりといいるーくメこあるホ親子ハ戸戰くて回意ふー陪添まりし奴僕ホ支くとぐそて知ふざれより一を云へど悪漢ホさくふ諾あるど后あハ奴婢の輩を打擲せーてふ形恐まく逃失られば悪漢ホ小母母子と永囲をいと喧ーく云罵ばば乳児を凹も失ぜ乳も臆れそぶあるくと泣居る。小母も驚れ周章と狼ふ深沈此附とを思ふー。もそるく悪漢よ數ひ奴家素より順礼を識らざれば。いるで逃ーー仕くん。只ゆるせもんと。メこあれば悪漢ホうち笑ひ。ものいふ実ふふ故ーもせんば此もくふて過ーがに我輩こまるで仍正とても。講和とるあハ忍酒を酌とるり。其ーのるくべきや否。小母喜び兎ーてざふるるくふば若干の酒をもまるふせん幸ねるるホ酒あり。まふ足を飲のせ尚家よりーて美酒を取寄まるふくべーとるくば悪漢ホこまを笑。そる宜斗らひるり。いざるらば此ホうて呑んどるふ。女児よ故とるるくとしるくとホせくの大漢子種の上ふ居るるふば。小母と乳児と中よるるくるるくばぎはぎまく酌をとり祝と腕をまくるる膝を露ーつ。詫ともこそば云き捉へ憂恥こんせん光景こ。乳児ハ首より恐れ戦と一言をものぐど

伏沈て泣居られ。小無八我子の身上を危ぶでこそいうはせんと。如を
悩まと折ふふに深羅登を面を蔽し。呼ある馬はうちふて。此新を
行く侍めり。小無八幕の裡より此人をこん。女児がまをうり走り出馬の轡ふ
とりそぶをこえうけちまりて頼こはゆふを目今母子不図危難に遭。
命のほどもそん未なくこ。めそれ助けるうれしと涙とともに義ふく
れとこゆメとゆれば彼人咳然として。いまご回意ふも及ばね射悪漢ふ一殺ふ
退ひまり。有をもいかご桜はまて。馬上の人ふ斬をかれば。馬上れ人
声を揚。人くこぞりのるまるひそ。我足下ふ何の仇ねの怨を受つる。
世ふ不ふなたりのを人差ひだ志るひと。制をれども聴つるど。我く
素より泳をぶ二ことあるれば仇もひし今世ふ及ぶと譬ふをぶりし
女性ふ殺むふ細のあるふを。占恢ぶとこと。こさる故止事なくて做

るひそ。命惜くふ女を与へよ。義好ぶてせど。目ふ物ふ見せんと。聞ひまり。
馬上の人微笑ひ。究鳥腰よられば。猟夫もこをを殺さどと。世の法もある
なふふ目今これ為ふ二人の女性縁故ふ知ふざれど身命に及ぶ危難ふ
逢ふり助けてよと云うけふれ。両刀帯ふ身のるふひ。退ふ退れね此場の
勢泳ふいうふ做とても一回ふ援けねさそどしなふふ。ふ柄ふ此女性を
奪ふてこんよと云うけて馬よりゆふふと。荘下ふ二人の女を彼ふふ忍ぶせ
身ぶまふ人ふしてさふくと立寄ぶ斬ふ光景ふ悪漢ども。ふ敗き笑ひ一新
車の火を消をふ一杯のふをりてとるぶごとしいふれね義好たるして
後悔せをにふくふに言罵りて桜連ふ斬ふかまふ桜合ふ多勢を相ふ
ぶさぶ一人秘術をそ。一戦ひぶ悪漢多勢ふりとふくども。一人の人ふ敵
からく深ふ泳ふ蒙ふなりのも好く渾刀をふく退去ふり。相ふなふまて

彼男刀を鞘ゐ納めたく汗ゐ〜ねぐ〜し声を揚前の女性出すべ〜故い逃〜〜ゐ。
他方へも去る人我ゐも面用のゆて心の急ぐがかく〜て又ふまうさうと
去んとさるれば小毎叡子忍び居〜うし木法を立出いやゐ新付まち
る人今日不料偏めて母子こまなる紅憂目ゐ逢いのちの行も危ゐきを
ゐんこの深き恵ふより斯恙なく免まし〜恩を報ゐでるこねべきにつゐたぐ
家い此所ゆより〜て遠くい行も隔ら移ぐ一まぐ〜ゆ〜しのひ移といひしたく
面をゆ合をゐこゐそもいゐゐ此人を絵馬ゐ写〜ゐ業平ゐ露も差いね
新くせゐ新児を想ふその人を不図〜て又るゐれば夢幻とも弁ら
なく〜ゐ〜ゐく胸をおし〜ちづめ再生の恩を感謝〜ては名をいゐゐ宜ゐ
〜いと熱ゐ問ゐれば甚附彼人微笑て今日のゐ某ゐ力の及ぶ所ゐ
ゐ〜ぶぐ正〜く當寺のゐ仏の助けゐ〜おばせよ〜しさまゐ我ゐ礼を

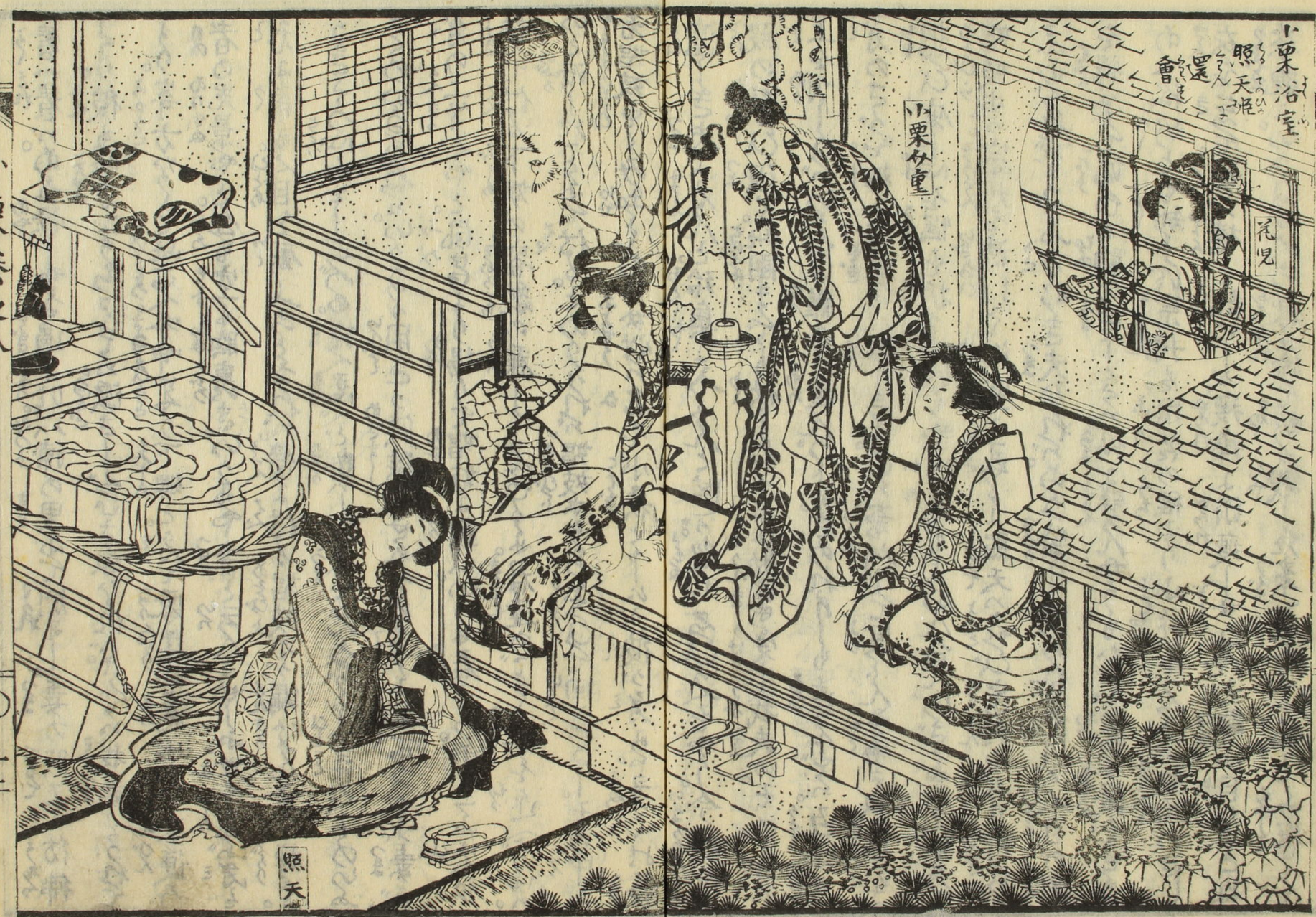
宜ゐゐ及ば〜。我又甚報を受ゐ仏ゐれば性名を名告べきゐあ〜ど
と〜ゐで小辞〜去んとさるれば母子を牲ゐ〜〜づめ只頻同く歩れど。
彼男も母子ゐ志を感じ。さぞゐ宜ゐを名告ぬも礼ゐ其〜ゐ三州
二村山ゐ住ぐゐ。宗冊と申ことのあるゐと笑より花児をさて〜ゐ志ま
拾馬を写〜その人ゐ〜ゐ義ゐ〜ゐあ〜ぐゐと。そぐ後心の限ゐ忍の
みぐれ君ゐゐと。胸苦ゐ〜ゐ折ゐ〜ゐ母の小益ゐ子心を爾ゐ〜ゐ移ぐを
宗冊をひきぐめて云ゐ〜ゐゐ。さて〜ゐ足下ゐ三州ゐ〜ゐ〜ゐと此所へゐ
程も遠くぐまぐ。今日を此邊ゐ宿ゐを借ゐゐべ〜。さゐゐひ奴家を
青墓ゐ住ぐゐ。今夜ゐ我家ゐゐ〜ゐ〜ゐあれゐと云ゐ〜清ゐ〜んと〜此
附前刺逃罷ゐし奴婢の告ゐて。主万長驚ゐ慌忙家内ゐ奴僕と姫
日ごゐ親〜く出入ゐゐ近辺の人ゐを召ひ妻子ゐ危難を故〜と。目今

此地に走来りて小母さまもこれをうけて好時〻〻と喜びて慌忙夫が
呼とる宗冊の力にうけて母子恙なきことを幸とする有枝有義ふと流話ハ
万長がごとく喜び宗冊ハ對ひ恭しく礼をのべ妻子が旅をとゝのひつる
感謝をのべてまけ行ハ妻子が再生の恩人いとゞ此まゝ置しまわくせん。
今夜ハ足非とも住ひまわくせ一杯の酒を進ぜ九牛の一毛の恩を報
まうさんと強ひ誘ひ〻〻おのゝ家路に赴きけるもの〻今日順礼を悪漢
ふと闘争その殆万長が妻子に及びしるを見陣岡戸ハが謀計あさ
ゝ礼児が容貌の美麗をうて勾引さんとるるりとそ順礼ハ打ち捨る者
を闘戸三田小蓼あそぶりゝ且説小栗ハ万長に誘引その家ハ
至りしが主万長前驅て家ハ走入り恩人の入〻せるを見て雖ども
門辺ハ歩く近く寄且進ハ酒肴のまうけせよと罵りつゝ近く

入し礼の限り多くハ歓待ゝ礼児ハ我為ハ人の来たりを喜び病も
おとゝり礼ゝ〻忠ごとして自ら配膳をすれば父母ハ女児ゝ感涙ハ
小栗を歓待をうけ甚礼を知ゝと今日の危難を助けられ嬉しき情りに
病もおとゝり心もとゞく助ゝるとよとき〻〻小栗をうるとして伽と
ゝる意ハ称〻と礼をのちゝとはゝ〻ゝ照天姫ハ今ハ小萩
と変名して万長が家の婢女と零落ゝ世を忍び夫の小栗に環
合志幸を遂んと憂年月を送りしハ今日ハ主の妻子礼て
宝光院の虚空蔵へ参詣せしハ不図危難に遭ひ危つき剣付宗冊ハ
助けられたる恩なゝ家に還て恩人を伽〻〻〻〻いうるゝ人
ぞとふうち主万長主生〻いゝハ小萩今夜の客人をおほうこなゝらぬ
恩人なれば郷屋敷ゝ家ハ馬あるハよく秣飼ひく

もはさとくべし。それより別あ見ぶを焚て浴し終ぬれば。よと。細ゆうあ云合に
ける。慌忙奥の方ゑ入あるれ小萩が主の命なり　櫛の用意し。客人の撃
あるきー馬の傍ゑ行く着るゑ不思儀や樣小安秀が飼あぐらゆくゑ駿馬
あて小栗よ乗ー鬼驃なれば。大ゑ驚るれ夢幻とも弁方ゑ。扨ハ今夜乃
客人ハ我夫小栗ゑありゑれ。さてふびん何ら故ありて。今甚主ハ替りしや。
さはあても此馬を乗るるりのハ東國ゑ我夫ゑ。ぞ又化ゑありとも
あぐんねりのうふに。ねまれ今宵の客人を。えまく。ゑくど下婢の奥へとて
叶ゑ。ゑが力及ばぬ。ゑ。ゑくと彼鬼驃よ。扨ゑ。風呂ゑ水を汲入く。火炉焚
けくゑ奥のうこの光景いゑと。窺ゑあるる琵琶の音ハ此家の
女児。乳児が。ふくべとあばゆ。ゑ今樣唄ゑ声。ゑけば。正ー夫助重の声
音ゑよくゑ彷彿。ゑばなぐ。ゑ以く躊躇ぶき。世を忍ぶをもうち忘れ。

憑ーき夫よゑんと殆奥よ入ゑんと世ゑ忍ち。ゑひゑを。今鎌倉
殿の勢ひ強く。此國までも伏ーあるゑ。勅を受ー我夫のその分乃
上を明ーるゑ。いゑるる難ゑ遭んぶゑ。さあれりも連ゑ。互ゑ忍
分のさぶを。知ゑるゑ。ゑん悲ーきよ。ゑい奈何して宜ゑんと。魂さゑ角さま
想ひ屈ー心を悩を折ゑ。ゑや。法場もよかんゑんゑ。いざゑまゑやとて
娼妓ゑ。宗丹を誘ーゑ。浴室よりゑ照天ハ表び宗丹を。ゑり仰ぎ
ゑんゑぶれば。まぶゑ方ゑき夫なれば。ゑる袈ーといゑんとゑれど。人目の関
を憚ゑて。悩ゑる胸の苦ーさハ。ゑよ。辟ゑん。ゑうもなく。落る涙ぞせき
あ人。ゑ。知ゑも知ゑば。宗丹を。風呂の裡より。小萩をゑるゑ。破垢つきし
衣を。ゑて。髪ハ櫛と。乱せーぶ。痩瘁ゑ。消痩ー女ゑれど。鄙ゑ目なまとね
姿貌よ。いゑるる人の。零落て。知る賤ーゑ。事ぶゑるとゑ。いとゑ。審く


小栗浴室
照天姫還會
小栗仆童
花児
照天

看一看ば。あるを怪しみて過ぎし。六浦の里にて別れ。妻の照天と彷彿
たり。彼も此方をうちまもりて。源さーぐむさうなれば。さては我妻なりけ
り。寄方なくて此所に吟呻すなり。下婢と。身を零落して忍ぶぐらや。不便乃
者の光景やと。心も空に胸塞きぬ。いかにや妻と云んとせしに。世を忍ぶ身を
恥ぢ角に人目を厭ふまでなれば。傍に付る娼妓ぞ。偏に人なるを憚る。
うきさうの心をもーちづめ。堪へ忍べど。袖に一言の。ものいふ
ことのかなわぬ。いうるる因るとうの浅猿や。せめての事に他所なるぞ。妻が
身の上哀やと。風呂より揚りて娼妓に對ひ。いかに君さち。あまたの火燭
禁じて。付る下婢の容貌の羅しく。こんなる君達のごとく客を迎へ。
いと涙ーしてとあり。付る。とあり。それば。娼妓ぞうち笑ひて回答る。その中に
者娼妓をぞみ。生くめの女性に名を小萩とーいふ。彼が身に。又くれ長

物語のいを語りまーしまるふせん。厭とゆメーめぜと。警欺ーしち。語出るる。
去年の秋に季なるる。主乃長所用ぐりて。遠江国よりゆりな。其ものに付。
岡戸三田小ぐるうちに。東国方あて。勾引まるよりあ。此小萩と主
乃長ふとちあ四百貫文にて買しに。乃長に良女を買ひく。仏楽ーいとれ。
あて娼妓ーせば。良客人の来ぬべと。喜び誘引還りて。流さるるとなく。
詞の諭せど。諾ふと。斯下婢とーいるり付りね。ぞーるふ故ありて。夫に別れ。
枕を守りあて。ありぬべーかぞうれ女子に。今世ーふ。いと珍ふうふい付ーるど
やと云ーるこのれば。小栗をぞうーいより。切なる志。事と不便ーるふ
ふ。胸をぞりさくぐ。ぞーるる。ぞーるる。涙を汗に紛ら。紬りて教をおーねぐひ
ものいふ小萩こ母ら。汝が身のうへ今ぞ。いとも憐れふぞや。志何ある
人の妻ぞーて爾零落ふぞうひーぞ思ひ。ぞうへ。嘆ぐこれ難苦ものが

節を守は其縁を全さんと欲するなれバ。いかな佛の夫でも。いかで喜びざらん
みづからそさする貞操の比みじきを。皇天いかで恵ざるべからん。盗主夫婦再会
なし榮ゆる期のあらんずるぞ。それを樂しみに今暫時憂を堪へて時節を
待て稀夫も妻の恋しくて想ハぬ日とてハあらざめり。是も爲すで故なりき。
世を忍びたる音なふらん思へば幸な死夫婦なる。嗚呼不便の小萩とあら
我を識らざる人形ぶふ貞婦の志氣の憐さに。余所の時雨に袖濡らしぬ。
是も他生の縁ならバかきとて逢んさらバぞと。言んとするを小萩おし留め。
いかなる方にまします。と欲ふもあらね奴家が身を不便とおぼし愛くれ。
殿を下しおかれし甚も嬉しく侍るも命あるぞ。奴家が身をあらね
夫ハ生別ま幾許の危難に遇しかど一回も夫に還會ことかなひ。顔
ことを云ぞへんとおもふから。難面命を存生て居るとはいへど。卯斗賤しき

妾ハ零落ど今にも夫の此身をとんか甲斐なきものとおとしめて夫婦の
名告ハ忍ぶましまし唯その事の悲しけれ。芭蕉水汲賤女となりて恥を
曝すも心操を露ほども汚さで存生へりいかでかは仏の種は苦
艱まてとおぼさば我夫の心解べき言の葉を教へてたべと云さして跡を
涙に咽ぶ外の見る目をはゞかりて明白ならぬ詞を稀ど少し恨に含む
うちなく気景は海棠の雨をおびたる風情なり。小栗も鼻うちかみて
思ひのまゝで宜ひそ。あゝまた鬼にもせよ汝が操を見る時は嬉しと
こそ云ふべき。いかで怒り疎むべき前にも言へし如く世を憚るゆゑ
目前に遭ひながらとても夫婦の名告をなさぬなれバ怨に禍身に
かゝる永く別れて逢せんとしても有所じくの想ひや發さるなかれ心を
急で時の至るを待ば人は忍の一字ぞ。よくよく守るべし奈何なる志をも

知らざるときは必ず忘れるよ。此言語を記憶せば好さらむ夫婦選の會らさとも治慰まんと今帰るべそ来よしと明白ふ出発の夜乃契りを結ぶの一式あふせぶ小栗ハ

さらばと立あがる唱歌の別後より閨続しで使ふ夫よ入るよまり。

第十四編

悪漢金を隙と青墓驛
忠臣主を蛟ふ赤坂原

あるる世當時万長が女児花見小栗の沐浴室に行るが歩付わるを

渇ふれど生ず孤ハ何事を做てやもとと密に浴室小栗の隙

より窺ひ着るふ小萩とうち物語ふひそ志ありがちる花景を詠るも

さこ姫く何縁ありやと対を竊めて人とと孤よそや小栗ハ小萩

と別是愁ひの色を面に表へ。強りまげよ立戻て原の一室に入れば。

人々酒肴を出し主夫婦たちかり尚多くふ食意々り。程なく初更て

なりもとべいぎや瞳ふ就ひ是の労と休々孤と閨房裡ふ誘引入れ

給ふ被せ庶さしけと食意より侍りし女ハ渾園の外ふ出ふ去ふ。

小萩ハ家業賑天に遭てそより其ふるをの之想ひ續れべ美酒を飲ま

ハ有を食べども生味を甘んぜど人くれ種く待過ぶりしかそ。

頼くてあり上今臥所ふ入れべ人も来ざるとおのれ一人瞰食打被て

庶くれど尚公ハ易んぜど只頼妻のこと孤のみ想ひ侍べけく今一回

逢ふ事もがと念ぜれと案内ふ旅宿そ。ぐくふ妻の居ざる

とも弁かとなくて心を痛め孤の涙を拭を雲泊夢も結ばでありるふ衝

更闌て人々熟睡ふ刻とあれば寂寥にてさびしきふ。国の樞と

あとくといと忍びあるふ音のみあぞ。ふの怪しみる夜乗人の耳目を

ちかりて旅寝の夢を結ぶうちハ緑林の白波かと耳を側よく聞に細く
妻の声なれバさてハ最前よりの一ツ今宵ハ忍べと謎かけし謎解ハこそ
と喜びつ樞を開き入らんとせしが。又おもひかへす斯燈火の明く人
人の咎んこともこそとかの人の小袖を燈架にうち掩ひされバ烏羽玉の
黒夜に迷ふハ恋なりけりしたがひに照天姫を甲夜に図ども更に見えねど。
人目を憚て傍に倚ながら言語をかハせしのミ互に憂を語らざれば
夢に逢ふる心地して急ぎ別れの袂を露けく思ひ屈しく居たりしが
別れに臨て忍べよといふ文字を。それを譬へし今夜ぞのべといふ謎なりと
人の寝静まるを侯て小栗ハ臥所より起出たり扨まさ此時この家の女児
若見を想ふ人の不意今宵わが家に宿りしハ月下翁のひきあはせかと
機会ハあらましと心ばよくもうちはげて想ひの程を知らせんと已まで

閨を忍び出たつかハるれて身に添れバ我より前に忍ぶもののあり驚きながらも
窺りて朧に露の星あかりにすかしてみれバ女なり。さてハ客人甲夜の言葉の
酌に立たる娼妓らのなかにて誰か客人に懸想しけるが忍びきて待居る
なりてありけんし。兎もあれ角もあれ我恋の妨しと思ひしかど。おのれも忍ぶ身
なればあれハ偽と咎んよしもなく。頭を低て案じ居る。照天ハ夫と知らずして
逆によそぐと見れバ女性のたゞひとり。閨の樞に寄居たれバ。扨ハ甲夜に
浴室にて夫の謎を猜したる娼妓のありて今宵ここに忍びて夫婦が契の
契を結ひ初んとするにてあらん。今ここにて咎れてハ一大事と縁の下なる
樹籬の木陰に身をかくし。皆附光景を窺ひ居るとも知らずして
若児ハふと頭をめぐらしともかくなれバ今まで居し女子のさてハなりしか
窺りつ。尚くまなく顔望せと影さへ見えざれバ思ふやう。我それ間に此閨の

うちしの裡へ忍び入けるゝ。ある如やうて樞ゆまとうひ。門あけんとすれは。尚附助重衣もろく焼火を覆ひ陰しく〳〵まら出々れて。一人の女子の忍び居るふ。黒夜は陰うれく花見とろ。よく足定ぐ引入れ。此時小笹へうぐ一人厠ゑ往んと此国房の様を伺ひてゐるうしゑ目今義見ぐ此国房ゑ忍入〳〵を窺〳〵心裡ゑ想ゆうさとぐ若き人なれば。甲夜ゆ酸ゑ〳〵もうう。女系のうちを語ふひ。忍バーたるよと必ひ〳〵ぐ。紙燭紙うち消去んとせーゞさるゆてもも女児ぐ前刺の動静。公ありぐゑえたれば。若女児ゆてハゆふ〳〵やと。樞の影ゆ身を寄して。たち聞きとゝ露ちふぐ。照天ハ庭の木陰より。荒児ぐ夫の臥所入るを窺ひ眷るより猛然と。嫉妬の公発動ゆ。ゆる悪の我夫や甲夜の謎ハ偽ゑて酸ゑたちゝ〳〵れ娼婦等の。容貌美女と語ふひて嬉めきつゝ体正ゆきよ。さる心根ハゆふざりしゆ。

こを天魔や邪崇ゑん此邪るてハ仇討ハ思ひも出さてありねど是ゆて思ひゆ。あてさ〳〵ゑ池庄司をそ。ためと十くとしふ伯臣ホの。一人もこにええざ。ハ彼们も祈めゑ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。退きしとゆぼゆゑり徙臣ゆも疎まれ東国の住居もるゝで此国ゑで。今冲ゑ手ゆるう浅猿や。よ〳〵人ハ疎ひとも我ハ配遇夫のとなく命ハ失ふとも誘めでやハゆ〳〵るきと心雄しく裾紙寒妻戸を荒くうち打けば。裡ゑ結る〳〵小栗より小笹小陰を躍り出く。縁故ハこゑ知りねさでゝう想ふ夫の身れ今明白ゑ人郷〳〵ばいづゝ〳〵ハゆハ必定ゑう。怒想ゆハ道理ゑ〳〵ぐ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。我ゑ任し給とゆ〳〵ゆ照天をひきなて〳〵奥のかゝ〳〵ぐ入ゑゑ。此ゑき小栗を国の戸を叩と荒〳〵ふ打れゝ。且ハ強るき且ハゆ。誘うゆゝ〳〵も燈架の小袖を元ぐゆハいゝゑ照天姫と思ひきゆ此家の女児ゑありしゆ〳〵ゆ。愕然と

小栗卷之八
小栗
花児
小栗語て
花児と臥室へ
行ふ
小姓
照天

驚ひて何といふべき言語なく。只忙然としてありしが。やゝありて助重を
形を改め言語を正しいふは花児ねし奈何なる縁故ありて我臥所へハ
忍び入せあふ答問あふてこあらば明日こそ笑め今宵ハちと疾く去ねへ
我柳下恵にあらざれハ人の謗めんことも憂し。早く此所を去給へ
といふに花児ハ面を揚女子の身ほそしく恥く。此所へ忍びのりし務を
然まそあらば我心君を見しより難面も想ひハ深き恋の淵沈みし
身くそ苦しされり。家恋のかなはずバ。明日とハ俟で今ら。命を
縮めバなど悪る人の傍に死ねなればせめての事と覚悟せり。回意を
笑しあひ孫と急迫し恋に助重ハ何と回意言語なく。ありしき手と組て
さし俯き。心を悩し居たりしが花児ハ尚もすゝとよりて。回意ハいうふ
といそがさるに。助重せうし言るるハ某今ハ孤であれど幼稚ときより

親々の許嫁せし妻もあり一夫一婦ハ庶人の常いかで二人の妻を有せん
此等の事を弁へて此事ゆるし給へと斯うち花児ハ面を赤めてきこえ
あらぬ道理あらず。それみ稲俤まであらんと心を移ると多し甲夜に
此室で下婢の小萩と親しく物語ひ涙に咽びなかなかときさてあさ悠やか
此所へ忍び来る。ほ折から小朧に霞む星影にさざりに誰とは弁ねど
一人の女が妻戸の外に身を潜めたゝずみて裡の光景を窺ひさる不審と
おもひ隙踏ゆら其影見んとなり何にもあらさてハ毎くも忍入り。物語り
をしと想ふから妻戸に身をよし窺ふ処をおんこまでかくし入れあへず。
まず谷きハ燈架に小袖をかけおきあふて今宵女を忍べして語らひ
あふにあらざれバいかで斯るまうけをせん欺きあふも程こそあれ女の
身して恥がましく。云出けるをむげあきれ。何面目に存命とか耐べく

用意の短刀を以て既に自害とこそ人はしれば。小栗慌忙おーさわぎ。慢りふ
をやまりの人ことに其短刀を取くんとされど花児は放まじ。止めもふを
我身を称くのくほもいと。小栗頭をうな低てまい其まい花も角も。
くくふ自害志のあつ。父母の嘆のいろ〻なり。子として犯を思わぬを人の
心のあふねそし熟く思ひ弁ひ人と詠をしこく己が方を迫りー新を
脱まんとされども花児は小栗を猶ー。あくくふ情まじその正ごとゆえ
の恨とあり。くそれよりも此まを放ち。死さしめんと争ふふ。小栗
やとく慰解ふ。詮なべもなれ折くに。国の妻戸をたー。ひらに此祭ふ
入まるくこそれ小栗驚きふり仰ぎ着まじ不審や此家の妻小毎
一人の女子のまを捨てまりく。誰ちやと思ひ熟ふれば。照天姫みく
ありしふ再ひ驚きまどふのこ首を低てさじ。一言まの云伝ひ

あのとれ花児は小栗がまのゆ心を乗ー短刀をぬくとりあく胸下ふ。
刺貫くとと思を小山世を奉おーさやまりと我女児奴家を殺
べきるのあるふ今歩附う行を俟と。小栗を頼着世の間れ並くの沢のぶ
やどりの形きりのいのじ。奴家が此所人出まー人今狩の始終を熟ふ。
女児が頼ことかまくんあくそもく花児は奴家くの実の子まくのうのこの
児が三才の秋のとく。実母は辞世ね。奴家その時実女まて。手紀もいまさ
ぞ有りし奈何過世の契りの戸。前妻亡てその後は花児奴家の別れこ
捨を離くく間もなく。実の母のおとくく形ふ。主の長もおのが子は羅ふ
ふれ化人のまーほよかく所の形く。遂ま此方と後妻と定められ侍り
なり。故は主なは花児をのて我子と呼は思られと今実親子となり
それ敬ふべうものあはねあたで生の実ま愛恤こ成長さまくまと

心に深く想ふら我子生ぶ思ふども此児を速器のことの。あうこそや
さとは夫ゆへ露ごろも知ふさぐ神や佛よ治でゝへ此家ふふなき
子をのこ祈ふ所ふる人ふ忘生育こゝの悪ふるや。物学びさとよ公倦
きひよ病をひき出せり。夫も奴家も心をいくあこゝいうあせんとふふ。
力とそ私へ醫師のこ治療のことを頼ふ病と変ひ生へけはそ此児年
ちや二八ふり春情ふふひなふ紙。寿を屈しふゆふ此病ハ発しふり。
茶飯の功より酵散の術で逆よ増ふりとゆえ私より実もそとふふ
心のはきしより酵をし寿を晴さをべく。女児が心のまよくに遠近をく
伴へり。今日も宝光院へ倶ゝ行れよ悪漢どもに出会て殆終風よ及ゝを。
不図おへをの助より危き而を助ふふり。生尚附ふる女児おんすぶ
懸想ゝしるひふに夫とハ猜せゝど正なれてとふ付ふふ不知顔

ちて過々行ふり爾ふ今夜先刺奴家厠ふ往んとて此処をふてふり
紙燭の火影さぐふふ知れ移と女の衣をふて娼妓ふのうちよりしてはき
のもとふ忍ぶよと思べ怒ち紙燭を消ゝ知ぬふふて行んとせゝ
爾れりゝハ盗人の女ふ扮打忍ぶやと妻戸の外面よりみくうちの
光景を究ふふ正ゝ我ふのさふなれ忍ハ意暴のふりせなく忍び
寄ふとふ射。又一人の女手ふ忍び出ゝ多くと獨言いふを立ゆよ美婢
小萩よふりは見ハ驚ふてふぶくも此りのを。この国の裡ふ入ひしふハ女児ふ
恋の妨ぞと付ひ行て避ゝふど兎角女児の寄ばふゝ再びものび
寄よふふふ死んとそ体光景を窺ひふふふ世もあふまで。
此雅さふくに及びゝと照天紙燭をいふ小萩よ今ゆへ知る我が
教よふく斗ひくふさそべゝ。奴家ふ此瓜ふ居んふふ妨もふふふふ

今世而をば去るぞし宗丹ぬしも我女児も小萩がいえ道理なるよ
又はそしぐれとも心のまゝなるゝ孫とて紙門の外よりはうでる跡より人
数こえ合し聚付言語もなるゝしが母のうて照天姫小栗と對して云出
まるゝ甲夜の頃と湯殿おいて殿様見しに別是夫婦なる人
如何ゝもして今一回こそまゝくさをれよとぞのとおのゝ思ひけく嬉く
より家の制の厳ゝ奚婢の身を世と絶へ寄もあはことなら
ざるをたゝくの乱まこふうち恋是前則小忍び事ゝ多紙筆夫人
又答めなるひしゝ恋ゝ何なる憂目ゝ遂ゝ母ゝと易きゝもあら
ざるしまそのまゝ裡ゝ伴ひまひ多く憂恼そのうへ人ゝて理なく笑こえ
多ゝおいとゝ身のうへ粗知りね。そを人ゝ漏さぞして世侘ゝて過されよ
きをはまを深き頼とあり。おとゝの身ゝいとはゝきことゝゝ思われど兼川

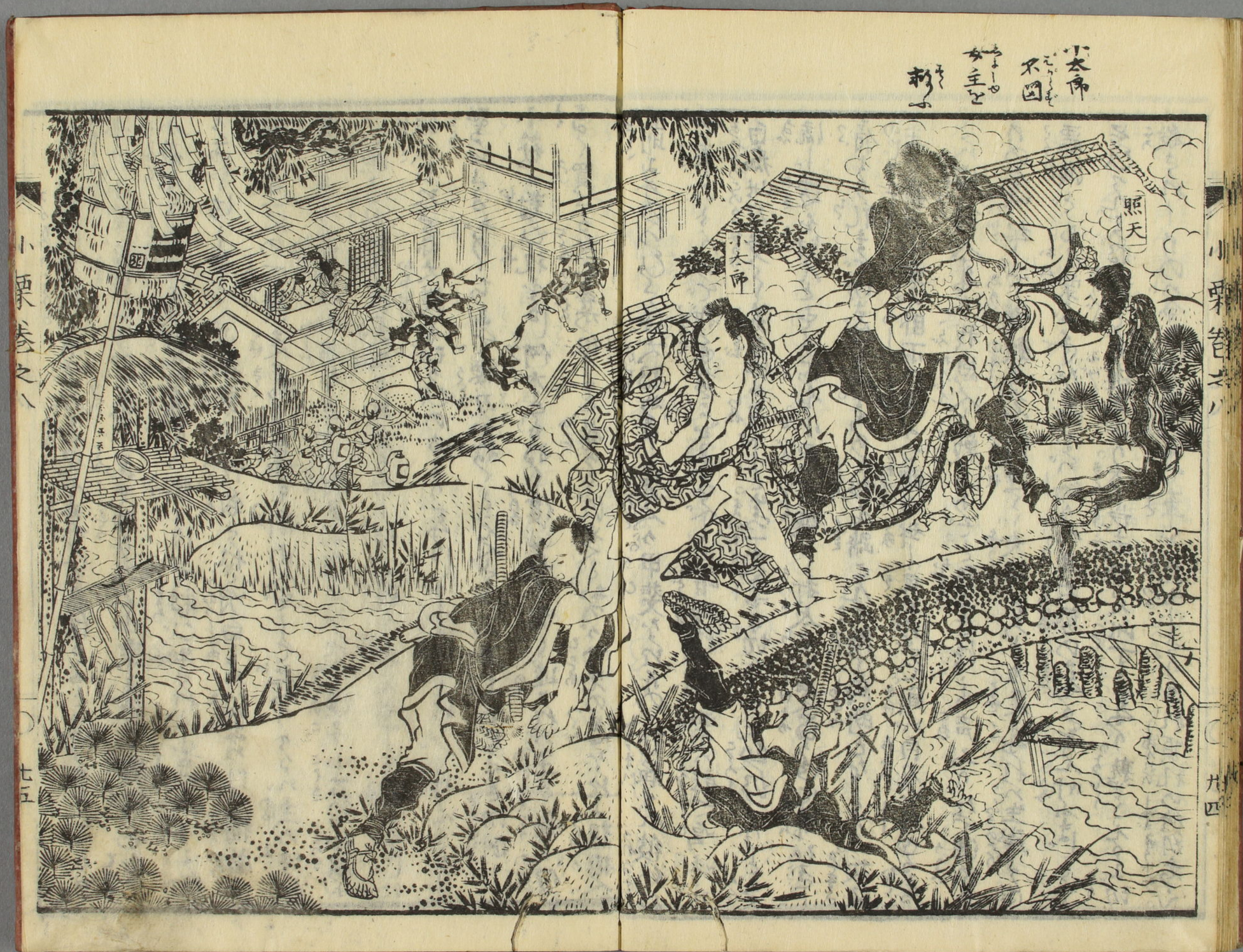
ゝと想ひ入ゝ宜ゝを主人とゝひ且ゝまを我身のうへと知り初ゝ
家制を破ゝゝ絆を乗ゝる恩ゝれゝいゝて程ゝをゝ奴家ゝ
ゝ称ゝこゝゝ命ゝ換ゝ弁ゝ回意ゝせゝ婚ゝこゝひ人の親ゝ已ゝ
子の姓行ゝを戒めゝ不義を募ゝゝ人ゝ誹謗や世のきこえ
思ゝねゝゝゝ恥ゝ義理ゝ我児ゝ命ゝ換ゝ眷恋せゝをゝ捨
おきゝ死もゝゝ形ゝゝいゝ悔ゝゝ甲斐ゝゝ女児ゝ恋
人ゝ今ゝ我家ゝ宿ゝゝ且ゝて付ゝゝ彼人の落ゝ憂ゝ
大きゝゝなゝ志氣ゝ爾ゝゝ女児ゝいゝゝゝ世恋ゝふゝゝはゝ
只ゝゝゝゝゝ氷人せんゝゝ做ゝゝ此事歳ゝゝ長ゝ漠ゝ今ゝゝ
その身の賜をゝゝゝ心のまゝくゝゝゝゝ深く彩ゝゝ
身をゝゝく好ゝもゝゝゝ客ゝゝ氷人せんゝゝ恵ひもかけどゝゝそゝ来ゝゝ

想ひ〻しうと既よ語ふうくふ辞べうも形し。夫さんあるふ奴家が身乃
悪を知りたく咎めもせと。尚も此身の暇をとふし心のうゝにさとと色と
情わうけまる主命に及びねまうでもと落へり。みづき姉脊い結びぞこも
一回の逢瀬あるうくふ花児ぬしへさうふもいつと主人婦のよ縁とびい
此身のうへも及ふん正るとゝおぼそとゝ松て世恋うあへて考ぐ見ゝ八夢ゝく
姫八ちゝ殿の心をとつふくゝへの命の二ッ三ッ云ふる伝うへしの大和唐
去昔より妻の外ふ妾をおく。例う多くしへば花児を愛ゝたまふ
とゝいうで嫉ゐう彩ひあらん世道理を弁へくと言語をそして怒れば
小栗咎を正らく我其とを知ぬふあゝゝ。爾あれ人ふハ其往あり。
我ふうとゝ甲斐なしのゝ一婦の対他妻ゐ某既よ妻あるゝ
正な此事をせん世ぞうゝ兎ゝ稚と落ふ毒多ゝくされば照天再び

云ふ彩ふ回意ふふ道理すぐふ。奴家が云へる云語を傍ひてハ人
のうへいうなる害ゝ生すゝくんそれのみ形ゝぐと世身まで辛ゝ憂ゝ同
連ゆくんゝ女のいそれぬ言形ゝふ昔よりして武士の名を知ゝれうへゝ。
心強きのゝ形ふゝ情もまゝ多ゝれば今の世までも魁る人をゝ義も
実もある君子と中侍人ふすの世を忍びおそとも容貌さまゝ
武士ゝ。殿の回意の一言ゝ。花児奴家が生死の境さゝ。ゆゝ縁と同ゝる。
小栗ふ妻の言語の濫生ふ実意を氷人と猜察されどいそさゝゝ想を
かゝへ人ゝ伝させんとさとゝぐゝつゝぎきゆうもなゝさゝうゝぶひて回意なり。
時ゝ俄に戸の外ゝ人の来れる気そひさゝゝ誰人のゝくんとゝ二人がいぶうり
それゝこゝいう毋盗人めゝうは大漁子七八人うちはれゝく呑まに白又
抱へ門戸を押ゝ入ゝ。中ゝも前よ進ゝる五十ぐうゝの

大漢子声を荒ふげ云へりゝ彩の今日室光院まて此家の女児と酒を
呑んとあらしを汐不意よりまり妨なりて女児をば奪ふて帰なあら
させよう。我くあまりの乱動ふ旅人と侍り此家ゝ宿り女児を連行酌
をふせんと甲夜より光景を変人に汝食わと我くを妨せ一人恩ゝ
負せ絶ふ花児を敵ひて我りの郭の楽酒我くあひとせんとゝ月今
此所へ来りしゝ徒ふ来つるも風情なく出入付る陽門の命なゝ孫
ごも剣舞一曲奉あて看よせんいざくと笑ねと頃ひとり小栗完示と
うちなびひいとも女さしき者う招賞敬してふせんと腰刀を抜そぐえ
多勢をおそまふたゞ一人抵るのとく抱めぐり切てまられ大勢ハ中ふ
とりこあうらふ永囲討取んと秘術をつて戦へども鬼神も欺く助をが微妙の左刀
あーらへゝ。残傷重傷を負れめなく逃をかゝてえくとりけり其時

前よりのひゝ体。大勢めきーゝ盗人ゞ甲斐なれの勃静ゝれ彼仏行
の車めゝんいで我ゝまをゝをゝんをゝぐゝと躍出れば小栗ハ能て鳴呼ゞ
白痴此刀受くゝ黄泉ゝ去べゝと生ハ一文字ゝ切付ゝを乙仏ゝと受
流ー。透を討んとさゝ乙を小栗怎爆ゝ打太刀を受留ゝて懸むぎし
肩より乳まで切さげられゝ。ゝめく処を踏こんて絶ゝ両断となゝゝ。奴又
主乙長ハ。小栗が卧乙の強ゝて睡を醒ー耳そぐゝて聞が白刃を接める者
こハ盗人の入ゝり。我恩人と戦ふあゝと怒ゝき怪ゝも声ゝりたて運命の
りのを呼起ー。下僕数多を引連ゝ夫婦のゝとも走ゝれば生殘ゝ体
悪漢ども小栗がまなみをば知ゝり且大勢のまゝをゝん叶のまゝこゝや
ゝ出ゝんゝを招散ゝゝゝ逃失ゝゝ。ゝ万長夫婦ハ此所ゝまゝり熟ゝゝゝゝ切
殺されーりのハ今日室光院ゆて事と慈出ーゝゝゝれ順礼の修行者ゝ


小太郎
不図
ちょうしゅを主と
頼む
照天
小太郎

さてゝ悪漢ども誘をのうけ。花児を奈んと志はゞあるゝさとゝ。
今又小栗が勇よりして再び花児助りぬと。小栗も深く感謝して花児
小萩ゝ手を挙るゝ。花児ハ帚風の影よりして忽ち出されど。小萩何方へ行
ゝ方やらゝふゝ人ゝと小栗ハ心愕然されと明白ゝ知ゝられを獨胸を
悩ゝ。一人の下僕走り息も衒ゝくゝて云ゝくゝハ主の呼び
聞ゝ。あゝ驚て即刻を立出ゝ射ゝ方ゝ見えなれ大漢子小萩を小脇ゝ
ゝい抱き外の方に走出るゝ。ゝ行ゝ殿を逐。五七丁も走ゝ尺に
旅人めゝ大漢子。ゝ方ゝ手ゝ小萩をはゞく打ゝ
驚ゝ。ゝ腰刀をぬゝとゝ。漢子をゝと切倒ゝ
小萩ゝ對ひ礼を。何方ゝも早く住ひぬと喘く述ゝ。主方長ゝ頃
ゝ買ゝ女を奈れゝと易ゝ。おゝが女児の悪なゝ想ゝ

急ゝ捜索ゝ。ゝ。小栗ハ下僕が物語ゝ安心裡ゝ。
これハ実ゝ小ゝ郎が我ゝ迎ひ出ゝ行ゝ不意ゝ照天ゝ遭ひ。その危急
救ひゝ。ゝ微ゝ心安堵ゝ。時ゝ天明の頃ゝ。ゝ長ハ
昨夜の光景を一封の訴状ゝ。知懸の官府へ訴ゝ忽ち下役
方長が行へ遣ゝ斬殺ゝ盗人の屍を検ゝ。人形紙以て
捜索ゝ。ゝ田の小麦ゝ白刃の強盗ゝ此一件の事ゝ細ゝ
渉ゝ。ゝ小栗ゝ立還り。照天が安否を知ゝ心裡ゝ合ゝ
ゝ主方長ゝ別ゝを告還去ゝ。ゝ引きゝ。ゝ
某ゝ。ゝ出ゝ。ゝ既ゝ。ゝ
ゝ。ゝ女児ゝ花児ゝ下ゝ眷ゝ想ひ死ぬゝ
妻が物語ゝて。ゝ。我ゝ夫婦ゝ。ゝ彼一人ゝ今ゝ死失ゝ

いろなり付くん。足下の旧光景を窺ふに唯人あてはゝ[illegible]
さぞ涙ぞおぼゝ[illegible]人の望まゝ[illegible]を果さぬに賊用の[illegible]
さぬが故なり。我富といふ[illegible]ねど[illegible]ても[illegible]今女児を
妻とゝ[illegible]ひ[illegible]。我財ある寶のかぎりを[illegible]残りなく讓り
[illegible]たちまふことを果し[illegible]此事業[illegible]
[illegible]足下の上を[illegible]粗ありねば恨[illegible]術もあれど子放ふ[illegible]
親に[illegible]ひあり[illegible]笑へ[illegible]小栗熟[illegible]うち[illegible]今万長[illegible]
逆ひ我身の上[illegible]知る[illegible]ふ[illegible]一生ふ内通。宿志の妨せんふ[illegible]
知られねるなれど。仮も荒児と妹脊の語ふ[illegible]ひせん我妻の想ふん
処も[illegible]苦。こゝ奈何ゝて宜らんと思ひ悩て居るうけはたゝの射少後
[illegible]出小栗よむ[illegible]ふ[illegible]氷人[illegible]既み

[illegible]ひ[illegible]小今氷人の居[illegible]ねとて辞[illegible]ふ正[illegible]れ[illegible]ふ
小萩が行衆[illegible]よかけ[illegible]ふ[illegible]彼が[illegible]ふ我[illegible]もいひて廉暑を存ぜ[illegible]
一日二日のうちふ必ず[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]此所よおくて還
[illegible]侯ふ人と云ふ小萩と足下とハ夫婦なりと知れ[illegible]ふ夫と[illegible]
いくて金ふ[illegible]ら小栗ごて法を安堵させ[illegible]紙止さ[illegible]そのうちに
女児が恵を称くんと夫婦交く[illegible]かれは流いふ[illegible]されとも還さ[illegible]小栗も
今ハ注方なく。一日くゝと止められ[illegible]ぼも居られる。放下一頭却説
這裏ハ美登小太郎を小栗が宝光院ふ詣げる射従者して行[illegible]
俄ふ赤汲まで所用ひでき[illegible]く彼所ふ使よゆき用のことを整[illegible]ふ
寶光院へ来り。主人を尋ふ知れど人ふ逢けども多れ叅詣の人
なれば[illegible]知れ[illegible]と笑ひ[illegible]ゆはよさて待[illegible]ひ[illegible]酒肆

るんどに入るふるゆりや と山を下り酒肆旅店を立より。紀年と容貌と
を云ひ尋ねれど曾て知ることのまるを索ち彼く。明日まさ見る彩
ぢやと蘇の旅店に一宿しそれが夜まだ明ぬ紙門蘭を出て旅人の
連なる人と物語る笑ふ虚空義堂の前ゆく青墓の宿の
万長と申さんいふ者の女児悪漢ホの為ホ悩まされを研馬ホ手ひし
ゆき人助け援ひ寄り世ホ情ホは人も有るれよとそのよ小を郎ぶ為う。
こハ正しく主君助重とのホ相遠めるほどと喜びたく記生く彼旅人ホ
女を救ひ一小手に何方へ行々給ほと問ふホ旅人のいふ其人をば万長使ひ
去ねと回答さればさそと夫より直ち万長が許ち往きて途中く
女を携ひ来る大漢子六七人ち行遭とり。不審く熟くこれば照天姫
ホてありしハ縁故を問ふと姫を牽きて来りし漢子を切殺し。残党を

逐散し一照天を助け縁故を問へば六浦うて夫ホ別れ後浪ホ毒手ホあひ
記憶の冥助ホしうて薫松の危難を脱れ漸戸稽ホて人買の手に渡て
万長ホ許ホ賣ひ来れ多くの若艱を凌き存生居るうし今夜ホ主人
ホ出ホ退舎互に身の憂を語らんと夫の国ホ忍ひ一に豫く主の女児
夫を春逝して。これが為ホ忍びしるの礼形きとり甚折らい盗人ありて。
奪ひ去られ世ホ亡まりねと首より尾ホ至るまで詳に物語れば美登
小左郎これを聞ちち且ハ嘆ち且を怒りしうどまんぐハ姫の悪なれを去ひ
急ぎ主君小栗を迎へ使ひんとせしが熟く思惟邂逅ち退舎ちる照天姫
を若万長ち取戻されべは惜きるのこ。主君ハ勇知ともに備りし大将
なれば必ず悪なく退ぬらんとそれより姫を伴ひ三州ち退り小栗が閑
居の尼山里ち忍び一置主の退りを俟ちさらに青墓ぶ出ひ

おぼつかなさふ。主の近くに往んと。幾回の想ひ辛くるごと。近比の世の間の光景群盗蜂起し。尋常の人とゐども荒しく。其心を免され孫ばかる斤山陰ふ姫一人おろが又奈何ことういでき形んと。心安拡さまとらとれどふ形くるばかりく人を雇ふく方長が許ふ入て小栗に書簡送るり。されど方長ふ漏んこと紙怖ふて照天のるの露ごとりも写さぶとさらば速ふ思り久まくと而已ゑひ申りちア。

小栗外傳巻之八畢